４　評価結果のまとめ

（１）教職員評価結果について（各項目の内容については資料１を参照のこと）

・Ａ「よくできている」、Ｂ「できている」の評価を受けた１４項目中、１３項目で９０％を超えており、概ね高い評価結果が得られた。８０％台は、道徳教育の項目であるが、８８％という数値は昨年度より５％高くなっており、着実な授業の実施が成果を上げてきていると捉えてよいと考える。

・Ａ評価とＢ評価のパーセンテージの合計について今年度の数値と昨年度の数値を比較すると、１４項目のうち９項目で数値が減少している。コロナ禍の影響で教育活動においても様々な制約を受けたとはいえ、この事実は真摯に受け止めなくてはならないと考える。

（２）保護者アンケート結果について（各項目の内容については資料２を参照のこと）

・Ａ評価とＢ評価のパーセンテージの合計について今年度の数値と昨年度の数値を比較すると１３項目中９項目で数値が下がっている。また、昨年度同様「Ｃ、Ｄ」評価は少ないものの、「わからない・無回答」の数値が高い項目が総じて低い評価に繋がっていた。

・数値的に低い評価となった項目３：進路指導に関する項目、項目１２：地域支援センターに関する項目については、どちらも校外との交渉等が求められたり、対象が校内外に及んだりする業務であり、今年度はそうした面にかかわる制約が大きかったのは間違いないと思われる。

・項目４：ＡＴ（支援）機器に関する項目と項目５：道徳教育に関する項目は、昨年度、低い評価を受けた項目として挙げられたが、今年度は昨年度よりそれぞれ＋９％、＋４％と評価を上げており、着実に保護者の理解が高まっていると考えられる。

（３）児童生徒アンケート結果について（各項目の内容については資料３を参照のこと）

・１４項目のうち８項目で昨年度より評価が下がっている。４項目で１００％の数値が出ているとはいえ、その原因については、掘り下げて究明する必要がある。特に項目２：「目標をもって生活や勉強に取り組んでいますか。」の数値が９０％から７１％まで下がっていることは重く受け止める必要があり、日々の学校生活、教育実践の中で早急に改善に向けた対応をしていくことを確認した。

※　昨年度末のコロナ禍による突然の臨時休業や児童生徒の興味・関心の高い活動(交流学習や校外学習、グループでの活動)の中止、新しい生活様式への転換など、児童生徒を取り巻く日常が激変し、それらに起因する心身への影響も大きいことが推察されることから、今後も一人一人の心情に寄り添った、きめ細やかな日常の対応を大切にしたい。

５　分析に基づく改善の方向性

本校は職員数が約１５０名と大人数の組織であり、小学部から高等部まで幅広い年齢の子供たちが在籍する。当然、所属する学部ごとの特質もあり、さらに児童生徒の発達の段階に基づく保護者の意識にも違いがある。そうした要因が教職員並びに保護者の評価やアンケート結果にも表れていることが十分に推察される。

教職員については、全員への周知を徹底するために職員会議やＷＥＢ掲示板・校内の掲示板を使った周知、ＡＴ機器の実物の展示等、様々な場面や方法で周知を図ってきた結果、質問内容を十分に理解した上での評価がなされていたと考える。

保護者への周知については、年３回の「学校だより」の中でアンケートの項目にかかわる内容を取り上げ、特に第２号では、昨年度「わからない」や「無回答」へのチェックが多かった項目に関する記事を特集して、アンケートに併せて配付した。また、ホームページに本校の取組を随時、掲載する対策を講じてきた。それがなかなか結果に現れなかった原因として、学校評価委員からは「馴染みのない語句や抽象的な漠然とした文言だと具体的なイメージが持てず、質問そのものの意味が保護者に伝わりにくかったのではないか」との意見が出された。「わからない」「無回答」を減らし、より適当な評価を得るためには、項目そのものや文言の見直しなどの改善を図っていくことが、今後、必要になると思われる。